

# 伝承遊びの獲得 —遊びの中の困難性—

青山秀継

## はじめに

今の子どもたちを見ていると、もっといろいろな遊びをして欲しいと思うことがある。とかく、室内での遊び、それもコンピューターなどの電子機器といっしょに遊んでいるというか、コンピューターに遊んでもらっているというような状況も見られる。これは私だけの思いではないと考えている。<sup>1)</sup>

ただ、そのコンピューターを媒体としたゲーム、玩具について論議すると、どうしても「良いか悪いか」という二者択一的な論議になる。そして、ゲームは身体に悪いか、長時間も画面を見続けることでどうなるという論議になる。そうすると、1970年代を中心にテレビがどのように子どもに影響しているか、テレビの害はどうか、という論議のようになる。そして行き着くところは、「テレビが障害児を作るという根拠があるか」とか「ゲーム脳ということは本当に、問題にされることがあるか」という論法であり、それが確定していないなら問題が無いのではないかと意見が大きな声になる。また、コンピューターなどの電子機器が苦手なおとなから見ると、目にもとまらない速さでキーを叩く子ども、また、歩きながらもメールを打ち続ける子どもを見て、驚き、その「能力」に感心してしまうこともしばしば見られることである。



しかし、今のような室内遊び、それも、ゲームに向かっている子どもの姿を見ていると、「これではいけない」と、思う。それを打破するには、遊びの良し悪しも大切であるが、実際に子どもたちに楽しさを伝えていくことしかないのではないかとその思いを持つ。

そこで、自分たちの思いの強い遊びを子どもたちに与えたいと思うことが多いが、与えるということで、子どもたちがその遊びで楽しむのか、子どもたちにその遊びの楽しさがわかるのか疑問が出てくる。

そしてまた、子どもたちは、少し難しい遊びに出会うと、それを投げ出し、簡単な遊びに向かう、また、刺激的な遊びに慣れているために、地味そうな遊びに興味を持たないということもある。

そこで、遊びの技術、楽しむために技術と、その遊びの楽しさをどう子どもたちに伝えるか。子どもたちにどうしたら楽しさを知る、掴んでもらえるかという課題が出てくる。

今回、私が幼稚園教員のときに指導した竹馬と独楽を題材に、主に、どのようにして、その遊びを楽しむための技術を伝えていったかについて少し整理していきたい。そして、その中で、切り離せない楽しさをどのようにして伝えていくかという点にも触れていく。

なお、私は子どもたちもおとなも遊びを「獲得する」ということは、次の2点が必要と考えている。

① その遊びの楽しさ<sup>2)</sup>を知る。

② 遊ぶための技術を会得する。

である。また、それらに関連してルールなどの理解もあるが、これは、①を基本にして、②の中で理解できると考えている。<sup>3)</sup>

## 1. 竹馬の楽しさ、上達方法

### 1) 竹馬の導入の意味

幼稚園に勤務していた1980年代の前半から1990年代の半ばまで竹馬を年長、5歳児に指導していた。どうして竹馬かといえば、やはり伝承遊びとしては代表的なものであるということと、当時、幼稚園の教育方針を論議していたときに、「どうも子どもたちに覇気がない」ということが話題になった。そして、子どもたちに精一杯、身体を使って、また知恵を使って、工夫する、また、仲間と協力していくことを経験させたいということになり、子どもが実際に乗れる車を子どもと作ったり、屋根と柱とベニヤの壁だけであるが、家作りに取り組んだり、園外へ出かけることなどに多く行なった。その一貫としてでもあり、屋外での伝承遊びとしての竹馬の導入が始まった。また、竹馬の導入のもう一つの理由は、難しいことに挑戦させるというものである。当時、「落ちこぼれ」ということが、教育の世界で言われ始めていた中、子どもたち自身、また保護者にとっても「やればできる」という自信を持たせたかったという理由もあった。それは、各担任からのクラス便りなどによる細かな状況報告と園便りなどで竹馬のねらいなどを父母それも翌年、翌々年取り組むことになるだろう年中、年少に向けて伝えていくことと連動した取組みである。<sup>4)</sup>

ただ、いずれにしても竹馬に乗れるようになること、また、竹馬で楽しんだということがなければ何ら意味がないと批判されてしまうものでもある。

今回は、どのようにしたら、全員が竹馬に乗れるようになったか、また、どのようにして竹馬の楽しさと出会ったかということを書いていきたい。

## 2) 竹馬ができるようになる条件

そのなかでも竹馬の指導である。以上の理由から、絶対に全員が竹馬に乗れるようになる必要があった。そして、私たちは、それが可能だと考えていた。

竹馬を「指導するための条件」として、次の3点を考えていた。

- ① 子どもたちに竹馬に乗るようになるために必要な「準備」ができています。
- ② 子どもたちが竹馬に乗るために、また練習ができるようになるために1人に1組ずつの竹馬と、練習場所、時間が用意されている。
- ③ 指導する教員たちに、指導する技術がある。

なお、①にしては、いわゆる「レディネス」の問題である。

私は、初めて竹馬に取り組むのは、年齢としては、5歳から10歳くらい、学年では、保育園・幼稚園の年長から、小学校の4年生くらいが適当であると考えている。その中でも、小学校の2年生

くらいが一番良いと思っている。但し、幼稚園では、その年齢の子どもを対象にしていないので、年長児を対象にし指導しており、今回もそれをもとに、検討を進めている。

年齢の「上限」も書いたのは、体重が重くなること、怖いという気持ちが強くなるということなどである。また、準備の問題では、巧緻性や握力、持続性などの体力の他、教員の説明を理解する力、困難に立ち向かう精神力なども必要な力を考えている。また、私たちの実践では、その下の年中、年少の学年で、年長児が取り組んでいるところを見ているということも大事な要素と考えていた。自分もやってみたい、できるようになりたいという憧れの気持ちと、明確には理解または把握していなくてもどのようにして乗っているか、どのようにして乗れるようになったかを観察している。

ただ、当然の話であるが、その年齢になれば良いというものではない。それまでに、年中や年少の時期から、園庭や園外にでかけ、広いところで遊ぶ、遠くまで歩いていくということをしていること、跳び箱、縄跳び、雲梯などの体育器具・遊具で充分体育的な活動、体育遊びをさせて、踏ん張る力、身体をバランスをとる力、また握力などをつけていること、また、それまでに、いくつかの課題に挑戦して、できるようになる実感、取り組む意欲を育んできたのである。

なお、今回の検討素材の竹馬と独楽は、他の遊びと異なり、できない、つまり、竹馬に乗れない、乗って歩けない、こまを地面、床の上でも回せないと、遊びに全く入れない、その後の遊びへ展開できないものである。

また、竹馬は、10年程前まで行なっていた実践を基にしている。独楽は、竹馬と同じ時期で



の実践とそれ以後も、児童館などで幼児や小学生に、また教育研究集会などでおとなに指導しており、そのときに考えたことも参考にしている。

竹馬の難しさは大きくは次の3点

- ① 壁から離れるところ
  - ② 歩きつづけるところ
  - ③ 最後の目標に到達するところ
- であると考える。

### 3) 壁から離れる

ただ、壁から離れる前に子どもたちが最初に困難にぶつかるのは、「竹馬に乗る」というところである。もう少し詳しく書くと、足を乗せる所に両足を乗せることである。子どもたちは、前年の年長の子どもたちが乗っている場面を見ており、その姿に憧れを持っており、自分もそのようにスタスタを歩くことを考えている。そのため、簡単に乗れると思っている子どももおり、園庭の真中でいきなり片足を竹馬に掛けて乗ろうとする。その場合、総てと言って良いほど倒れる。そこで初めて竹馬は園庭の真中で乗れない、簡単に乗れないことを実感する。

そして、どうするかを考えていく中で、昨年の子供たちは練習の初めの時期には、みんな園庭に面した壁にもたれていたことを思い出す。そして、それぞれ壁を探す。リズム室のガラスのところにもたれる子ども、園舎のコンクリートの壁にもたれる子どもも出てくる。

もたれても、そこから足を掛ける、それも片足をかけることは、もう片足が地面についているので、なんら問題はないようであるが、もう片足を掛けるとき、当然のように左右のどちらかに傾く。それで降りてしまう。竹馬に乗って歩くという状況ではない。

しかし、できずに立っていると、そこが通路であるために、先生や他の子どもたちの通行の邪魔になって、文句を言われたり、また、通るたびに降りるということになる。

しかし、意を決して、前に踏み出すと、当然前に倒れて降りることになる。しかし、踏み出したことは大きい。



### 4) 歩き続ける

一步踏み出したら、止まらずに歩きつづけることが大切である。どこを通るかではなく、ただひたすら真っ直ぐ前に向かって進む。結果的にフラフラして文字通り右往左往するのである。

竹馬は、前後左右に倒れる危険性がある。斜めにだってある。自転車は、基本的に横に倒れるだけである。左右へのバランスを保てば良いのである。と言っても、最初はそんなに簡単ではないが。

前に進まないで倒れる。もちろん、上達すれば立ち泳ぎのように足ふみしていることもあるが。そのために、多少前に傾けて歩いていく。この傾きが少ないと、後に倒れることがある。また、不安だから後に降りようとする。しかし、後は見えないことがあり、また、身体のバランスが保てないので、危険であり、基本的には前に倒れることが安全から大切である。<sup>5)</sup> 初めの頃は、壁から離れてもすぐに降りていると、本人は、そのまま立って降りているつもりでも壁にあたるなどの危険性がある。

そして、前に進むときは、バランスを保ってどんどん進むのである。このとき、おとながよく後を支えるようにしている姿を見かける。これは、いつでも（後に）降りる意識が出て、進まないし、そちらに重心を置くのでかえってバランスを失う。これは自転車で片側に補助輪をつけて乗っている子どもがいつまでもその補助輪の方向に重心を置いているため、なかなか真っ直ぐな姿勢で乗れないことと同じである。

竹馬の場合は、前にいて、いつでもその2本の竹馬を両手で受け止めることで安心だという意識を持たせていく方が有効である。そして、心配だからその方向に早く進みたいということで前にどんどん進む。また、前に降りるという基本動作を確実に身につけることがある。

自転車でもそうであるが、一步一步というのは、かえって難しいものである。多少の歩幅でドンドン進む。また、多少はスピードがあった方が歩きやすいものである。これは、自転車で遅乗

り競走をした者には理解できるのであるが。

また、大股でドンドン進み、多少のバランスの崩れも更に大胆な歩幅で克服して進む子どもも少なくない数でいる。そして、更に、練習する中で適当な歩幅を見につける。ただ、早くゴールに行きたいという意識で焦って歩幅を大きくする場合はなかなかうまく行かない。

また、前述のように、前後左右に竹馬は倒れる可能性がある。また、前に進んでいくことでしか倒れることは防止できない。もちろん、上達したときにはその場で足ふみもあるが。子どもたちは自分なりに安定する方法を考える。竹馬を斜めに倒し腕を突っ張るようして乗る子ども、竹馬は殆ど垂直であるが自分の頭を竹から突き出すようにして少し重心を前にして進む子ども、足を広げてコンパスのように進む、これらは自分の体験で自分が掴んだフォームである。どれもその子どもなりに理屈に合っている。しかし、上達すれば、一般的というか教科書的なフォームになる。それもまた一番合理的なのである。

ただ、この場合もおとなが見守ることは子どもに大きな影響（励み）を与えていることに気づかされる。練習している子どもに「先生、見てて」とよく言われる。そのときも、他の子に注意が向いたりすると、降りてしまうことがよくある。また、降りそうな子どもに、「降りるな」ときつく言うと、ハッとして体勢を持ち直して、進むこともある。

#### 5) 最後の目標に到達する

私たちの指導方法では、10mを到達基準にしている。ここまで乗れば、なんとかその後に発展していくという基準である。水泳などでは、50mを基準にしていることが多い。それである。それを越えると、適切な表現でなかったが、わかりやすく「合格」としていた。

10mは概ね測ることはあるが、大体は、リズム室の壁から、砂場の端のラインとか、年中クラスの壁から側溝の前までという程度でわかりやすい、日々変化しない物で示している。

そうすると、毎年このような子どもがでてくる。10mの手前で降りてしまう子どもである。ラインの30cmくらい前で足が揃い、そこで前に踏み出すと合格である。このときは、竹馬自体がラインを超えなくても、川を渡る要領で、ラインの向こうに飛び降りれば合格としていた。子どもたちにも知らせている。

しかし、手前で降りてしまうのである。グラグラして落ちてしまう子どもは多くいる。考えれば一番「自然」である。また、それまで気張ってきたのでなんとか越えようと焦ってしまい、それでバランスを崩して落ちる子どももいる。ただ、気になったのは、そこで前に倒して越えるということができなくなってしまっている子どもである。何回も練習してきてやっとゴールが見えたのに、手が届かないのである。このような、ゴールを掴むことの難しさはやはり子どもの遊びにもあると思われる。10m近くを何度もできているということは、その後更に上達した子どもは別として、超えた子どもと越えられない子どもの力、技術にはそんなに差はないと考えられる。しかし、越えられないのである。10m自体がそんなに意味があるとは思われない。前述したとおり、園庭の物、構造物などを印にしているので、場所によっては差が出ている。大きな時には、1mくらいの差がある。また、実際に1m手前にラインを引いたこともある。でも越えられないのである。

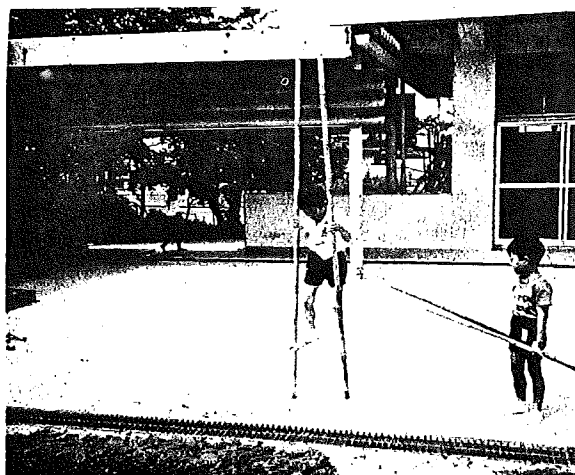
この肝腎なところを乗り越えるのも、「遊びを手に入れる」ための大きな力である。野球などの守備で「たまぎわに強い」ということが言われる、サッカーでもなかなか点が取れないのは「決定力不足」だと言われる。もちろんこれは純粋に技術的な問題もあるが、それプラス何かがあると思う。

子どもたちには幼児であっても乗り越えて欲しい「壁」などである。

#### 6) できるようになる力

このような難しいものなのになぜできるようになるのかということである。それは、子どもたちにできるようになりたいという気持ちが大きく関わる。

年中や年少のときに、年長の子どもたちががやっていることを見て、憧れ、自分もできるように



なりたいと思ってきた。また、そのように配慮してきた。そして、その年長になったときに竹馬ができる、乗れるようになったということが自分が大きくなったという成長の証でもある。だれでもそうであるが、子どもは自分が大きくなったという実感を持ちたいと思うものである。そして、それならそれを実現させて、成長を実感させることがおとな（保育者）の使命と考えている。

なお、竹馬の取組みをする中で父母の反応でふれたいことが2点ある。1つは、わが子が竹馬ができないということの理由を他に求めたいということがある。まず、言って来るのは子どもの竹馬が良くないということである。この取組みの中では、鉄製の竹馬でなく竹で作った竹馬を使用している。その場合、取り組む全員が同じ太さ、足を乗せる位置が同じとはならない。父親参観で父親が作るために、「夫が不器用なので、実家の父に直してもらおう」という意見もある。<sup>6)</sup> また、「竹馬に教育意義があるか。そもそも竹馬が幼稚園にあっているか」とも言われる。それらは、子どもができないための焦りを父母も持っていることであり、乗せるようにするしか解決しない。事実、竹馬に乗ってる我が子を見て喜ぶ姿や「この幼稚園に入れて良かった」と言われる方が多かった。このようにこちらは、理解ができるし、実際の姿を見れば乗り越えられる姿勢である。しかし、難しいのは、予習をさせる父母である。<sup>7)</sup> 竹馬ができるようになると、帰りの会で皆に紹介し、クラス便りに載せる。焦る気持ちがわかるが、どうも我が子がみんなより早くという思いがある。これは残念である。他の子ができて、残念とか焦りの気持ちをバネにすることができるようになる。また、周りの子どものようにすがヒントになってできるようになっていくことをしばしば見ることができる。できた子が教えてできるようにするのである。

ただ、ここまで、言わば、「合格」するための筋道を説明してきたが、習得したら終わりというのではない。初めに書いたように、「遊ぶための力を獲得した」のであり、「竹馬という遊びを手に入れた」のである。これから竹馬を遊ぶ本番である。また、そのことを、子どもたちに提示していないと、遊びも単に「苦勞して勉強するもの」になってしまう。また、その遊びができるようにという気持ちは湧いてこない。

私たちはできるようになった子どもたちにできるかぎり自分で、自分たちで遊びを展開するようにしむけてきた。その中で、子どもたちが産み出したのは、竹馬での鬼ごっこ、



サッカー、ダンスなどである。サッカーは、布製の、ちょうど縫ぐるみのような布のボールを竹馬で蹴りあい、ゴールをねらうのである。よく、3人くらいずつでやっていた。難しいのはゴール・キーパーである。ちょうど、水球のゴール・キーパーのようでその場で足ふみをしていた。また、ダンスは数人で揃って、前後、左右音楽に合わせていっしょにステップを踏むのである。

竹馬で遊びというと、リレーをしたり、高い竹馬にのることがある。保育雑誌などやテレビなどで町の話題などとして見かけるか、これらはあまり遊びとして発展しないと考えている。リレーでは慌てるし、慌てると全くというほど競争にならない。また、乗り方も雑になる。より競り合うと接触が多くて危険である。また、高い竹馬はまわりに自慢するだけで自由に乗ることができない。また、転倒の場合、後に倒れる事が多く危険である。その上、本人は自身を守るために両手を離して着地する。その場合、まわりの人間に竹馬を当てることになる。もちろん、前述のサッカーも同じであるが、人数を絞ることでぶつかりは減る、また、競争と違ってそんなに焦って走らないこともあり、リレーよりは安全である。

ただ、乗れるようになってこそ竹馬は楽しいのである。これから本当に子ども自身が楽しむということであり、そのための「指導」は技術の指導よりむしろ難しいのである。ただ、今回はそれが主題でないので、割愛するが、機会があれば展開したい主題である。

## 2. 独楽をまわす

### 1) 独楽の魅力

独楽は、竹馬のようではなかったが、秋から冬にかけて子どもたちに取り組みせたい、できた

ら流行させたいと願っていた活動であった。

この幼稚園に来る前に在職した中津川市立の幼稚園は、東海地方では一般的だった鉄製で、芯が上にでていない独楽を子どもたちと行なっていた。

しかし、それは、岐阜県で地域の活動を旺盛に行なっている幼稚園、手先を使う、身体全体を使うことを保育内容に大きく位置づけていた幼稚園、また、地域の生活がまだ残っていた地域だからできたことであり、名古屋近郊で、その地域の以前からの住民の子どもでなく、新住民の子どもたちにはとても難しいことであると、着任1年目に思い知らされ、全国共通の「子ども教材」的なブリキで芯が出ている独楽を使うことになった<sup>8)</sup>。

独楽の回すための大きなポイントは、①を地面と水平に投げること、②そのためにも手のひらが（多少丸くなっても）地面と垂直であることの2点である。

なお、私も参加する「子どもの遊びと手の労働研究会（手労研）」が1989年に「遊びと手の労働の教材」ブックレットを作成した。全部で30のうち、第27集を担当し「初心者向け こまのまわし方」として、冊子にまとめた。

今回はそれを基にしながら、その後、多くの機会におとなにも、子どもたちにも独楽の指導をしてきたので、その後気がついたことを書き加えて今回の文書にしたが、さらに、「手引き」そのものも書き直して、さらに独楽の普及に努めたいと考えている。なお、ここでは右利きを対象として書いてある。左利きの場合は左右逆であるが、独楽紐などは右利きように縫ってあるので少し不便であるができないことはない。<sup>9)</sup>

## 2) 独楽の種類

独楽は大きく、A. 紐を使って回すものと B. 紐を使わずに、手で挟んで回したり、指で捻ってまわすもの 2つに分けられる。今回は、紐を使ってのものを中心に検討するが、その中でも、芯があるものと、芯がないベーゴマに分けられる。ベーゴマは東京地方を中心に行なわれていて、この地方ではあまり見られない。私自身、なんとかまわすことができるが、なかなかその楽しさを実感するまでに至っていない。

芯のある独楽の中でも

- a) 芯が上に出ているもの
- b) 芯が上に出ていないもの

に分けられ、材料をみると

- i) 全部 木でできているもの
- ii) 芯が鉄で、残りは木でできているもの
- iii) 芯が鉄で、残りがプラスチックかブリキのもの

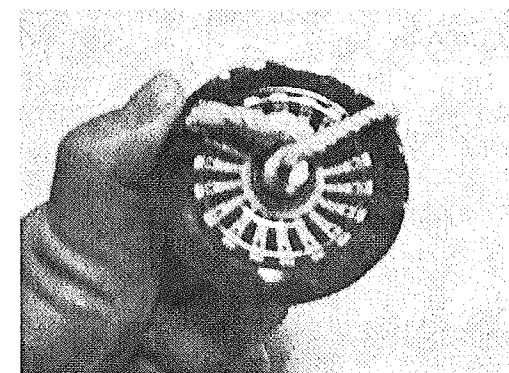
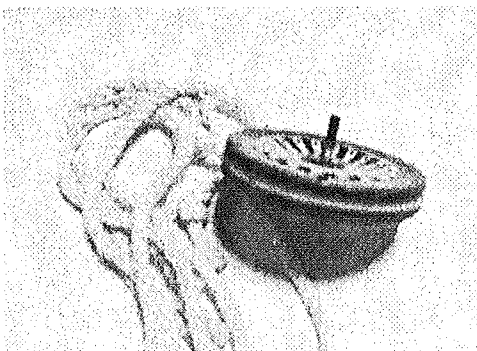
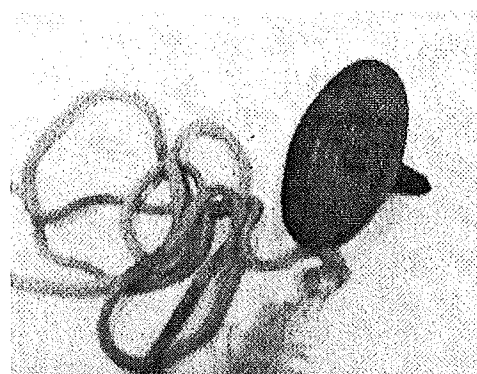
- iv) 全部 鉄でできているもの

となる。もちろん、他の種類もあるが、現在、購入が容易なものは以上である。東海地方で私が子どもの頃の昭和20～30年代は、b) 芯が上に出ていなくて iv) 全部鉄でできているもの（このページの上の写真）が一般的であった。現在も、町のおもちゃ屋さんでは良く見かけることができるが、幼稚園、保育園、小学校、児童館、学童保育などで子どもたちに与えているのは、a) 芯が上に出ていて iii) 芯が鉄で他の部分がブリキのもの（このページの中の写真）がほとんどである。私も、25年前から幼稚園などで子どもたちに与えているのは、それである。

後述するが、この地方で一般的だったものに比べて、非常に簡単に回すことができるからである。<sup>10)</sup>

## 2) 紐の巻き方

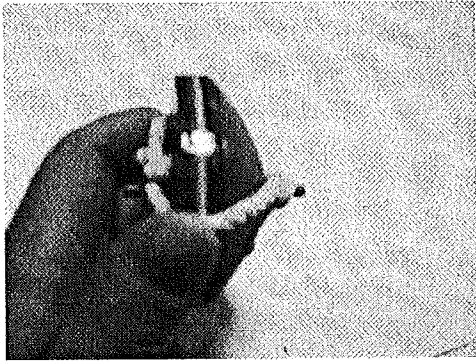
独楽は回すより、紐を巻くほうが数段難しいと思う。だから、子どもに指導するときは初めの頃はおとなが巻いてあげた方がよいと思っている。私はよくそうしてい



る。独楽を回すこと、自分の回した独楽がまわっていることが嬉しいのであるから。そして、回せるようになると待っていられなくなって、苦勞しても自分で巻き始めていく。

巻き方のコツは、上に出ている芯に巻きつけて引っ掛けて引いてみる。このとき抜けたらダメです。これが案外多い、そして、ここで緩くても巻いていこうとしても、回すときにクチャクチャになって独楽は回らない。グイと引いて緩みのないようにすることが大事。

そして、順に巻いていきます。以前は「大和屋の守口漬け」の commercials のようにと言っていたが、きれいに、つけるようにしていく。ただ、途中で緩んだらやはりダメである。



最初に上に出ている芯に巻きつけて引っ掛けて引いてみる。11) そのときに抜けたらだめです。事前に紐の端にコブを作っておく。また緩んだらうまく回らない。グイと引いて緩みの無いようにする。

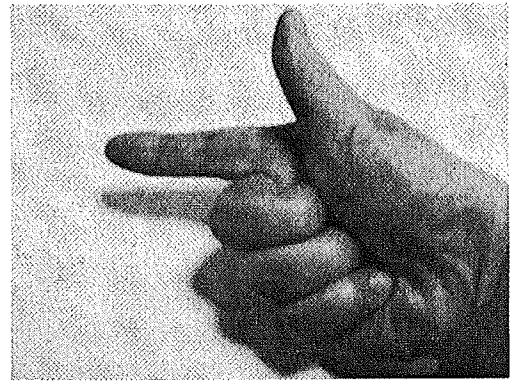
巻く要点は2つ。芯に掛けた後、反対側（独楽が着地する所）に緩みなく引っ張っていくこと、そして反対側から順に緩みなく引っ張りながらグルグル巻いていくことである。先の細い所から坂を登るように巻くときは、左手を持ち替え、土手を指先で掴むことが大事。

そして、巻き方は手前は下から上に、向うは上から下になる。右手から見ると時計回りでドンドン輪が大きくなるはずである。

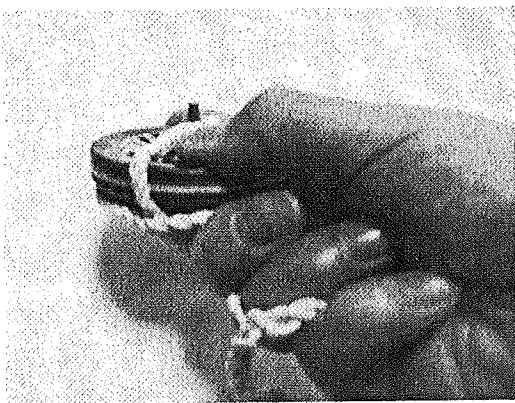
### 3) まわし方 その1

紐の端を薬指または小指に巻きつける。というより、その指を回して巻きつける方が良いのであるが、指を薬指、小指のどちらにするかは大きな差はない、その者の好みであったり、誰に習ったかで伝わるものである。私は父親に習い薬指派であり、私に習った子どもはほとんど薬指である。12)

その後、ピストルのように指を構え、親指を芯の隣りに添え、人差し指は土手に当て、中指は斜面に置く事になる。



そして投げる。投げるときは、下に向けず水平に投げる。野球などの上手投げで手首を返すと回らない。横手投げで、気分は多少下手投げで、それでいて、独楽（の土手）は地面と水平で。手は大きく振る感じが大切。子どもは難しいがおとなは躊躇13)の姿勢で、地面から少し手を浮かした形で投げると良い。



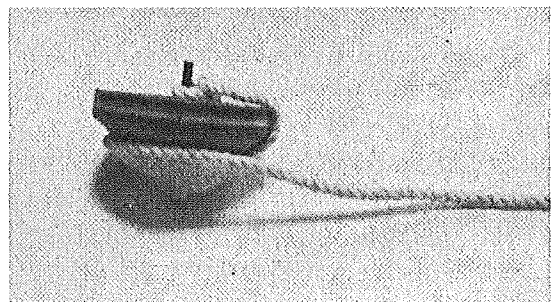
### 4) まわし方 その2

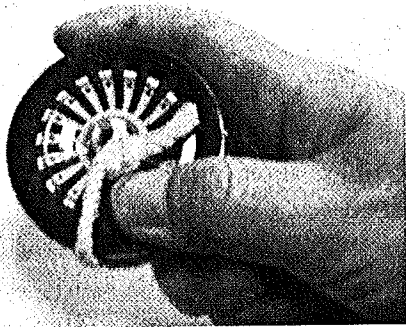
引くことも大切である。投げた後、中指、薬指、小指でしっかり紐を握っていないと、独楽は飛んでいってしまう。実際に、投げるという動作としっかりと握っている動作を同じ腕で行なうことは意外に難しい

ものである。しかし、これが肝腎。引けば、空中でも戻ってくるし、勢いがつく。

独楽が飛んだときは、飛んで行く方向に力が働く、紐を握っていなければ、そのまま飛んでいくだけであるが、握って止めたり引くので、独楽の紐は解けていく。そして、それが独楽を回す力になる。投げる勢い、引く力の調節で独楽が回る位置、速さが決まる。でもここで一番大事なことは、紐を握って離さないこと。

ここまでくれば、もう独楽で遊べるはずである。「土俵」を描いて、「相撲」をしたり、回し続ける競争だってできる。





### 5) 応用

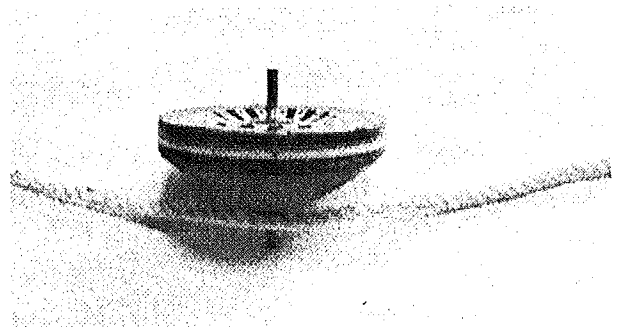
回るようにすることが今回の説明の目的であるが、やはり応用して楽しまなくてはつまらない。手乗せが基本になる。幼児でも年長児ならできるようになる。これができると「コマの名人」の気分である。初めは投げて大きく引き、自分の手を越えて後ろの位置で回してみる。そのあと、自分の手の近くを通るときに片手（投げた手）で掴む。それができたら、手を水平から投げた方向で30度ほど下の斜めにして手に乗せる。ヨーヨーの気分である。

それができたら、皿乗せ、左手にインスタント・コ

ーヒーの蓋などを持って、そこに乗せる。

そのあと、綱渡りができれば曲芸は一先ず完成である。これは手乗せの後に、左手で紐の端を掴み、そこを渡らせるのである。実際には紐の上を独楽の先は乗らない。先と土手の間を紐の上に乗せるのである。

あとは鬼ごっこや、リレーなどがある。これは回っていないと走れないルールで行なうと、回るより、確実に紐を巻くことが大変とわかる。



### 6) 指導のコツ

独楽でも一人一人で大変なところ、難しさが違う。一番難しいのは、地面に平行に投げることである。子どもの後ろにまわって抱きかかえるようにして、右手で右手首を持ち、1、2、3と声をかけながら、2回、3回といっしょにやり、そして、その後2度、3度投げる格好だけした後、手を離してもできることが多い。そうすると、たとえ持ってもらっていても自分でできたという実感が持てる。その感覚を忘れずにやるとできる。

独楽は要領を掴むことが難しいので、何度も、くじけずに繰り返すことが基本である。それと、あまり時間をかけないこと。私は、教員や保育者向けの講習では、「30分でまわせます」を売り物にしている。一気にやることも大事である。

## 3. 伝承遊びと遊びの獲得

子どもたちに、いろんなおもちゃで遊んで欲しい。しかし、なかなかその願いが叶わないことも多い。また、その思いも多少、譲歩と言うと変であるが、少し緩めても良いと思う。独楽のところで書いたが、東海地方の出身である私はやはり鉄製の独楽も回して欲しいと願っている。勿論、町のおもちゃ屋さんでは売られているのだが、なかなか難しくできない子どもも多い。だから最初は芯が出ているブリキの独楽で十分だと思う。

それに、子どもたちのお父さん、30歳代が多いと思うが、もう既にこのようなおもちゃでは遊ばない世代だと思う。私たちが独楽を回していた農家の周りの土が固い軒下や集合住宅の踊り場などもそう簡単に子どもたちの遊び場にならない。竹馬など、それこそ1951年に名古屋市内で生まれた私の周りでは材料を手に入れることも、竹馬で遊ぶ場所も見当たらない状況であった。私が竹馬を見たのは、小学校に入学した年に現在は日進市になっている赤池にある親戚の庭で従兄弟がやっているのを見ただけであり、私自身としても竹馬は独楽とは異なり、子どものときにやった思い出の伝承遊びではなく、いわば幼稚園の教材として適当と認めて導入している伝承遊びの竹馬である。

このように、既に伝承していない遊びが多いが、良いと思うものを、できたら経験があるものを中心に子どもたちに伝えていくことが大切である。お父さん、お母さんができないなら、おじいさん、おばあさんが孫に、または自分たちの大きくなった息子、娘に伝えていくことである。

そして、それは竹馬の項でも書いたことであるが、楽しいものだという子どもたちに知



らせていき、憧れをもたせ、動機付けのための“見せびらかし”をしていくことが大切と考えている。

幸いというか、私自身、学生時代の先生の影響もあり手労研に入会し、長い間、地元の世話人として、この地方の子どもの遊びや工作などに関心がある人たちとの接点を作ることができたし、全国委員にもなっていたので、他の地方の実践者とも全国大会やその他の会合などで接することができた。

手労研でも、退職した先生方なども他の教育研究サークルのように退会するのではなく、引き続き自分の楽しみのために、また孫と楽しく過すために会を続けている方が多い。また、遊びや工作のイベントに行くと、教育関係でない、一般市民の方で、ボランティアなどで指導に当たっている方を良く見かける。

そして、その中で、単に子どもたちを指導する、遊びや工作を与えるというのではなく、何故この遊び・工作をしているのかということと話し合う機会も増えてきたように思う。

そんな中で、このように少し難しい遊びもまた広まるのではないかと、テレビやゲームの画面ばかり見ている生活から子どもたちが開放されていく一歩になるのではないかと考えている。

なお、伝承遊びには男の子向けと女の子向けと意識されることが多い。それでいけば、今回の竹馬も独楽も男の子の遊びである。しかし、幼稚園などで指導していることは男女ともに行っていた。また、逆にあやとりやお手玉は女の子のものだと見られているところがある。

私は、両方の遊びができた方が良いと思う。両方の楽しさを知って欲しいと思う。指導する、伝える先生などにもぜひ両方の遊びに取り組んで欲しいと考えている。女の先生は男の子の遊びが苦手、また、男の先生は女の子の遊びが苦手ということがある。私が学生だった30年前には、野球や機械いじりをする女子学生は少ないころであった。もちろん、ソフトボールクラブの女子はいたが、野球のようなものは女の子には無縁に近かった。15年位前から、若い女の人で、気分転換の為にバッティング・センターに行く聞いて驚いたものだ。また、当時、禁止されていた女子柔道の試合も、今では当たり前、レスリングも当たり前である。いろいろやって欲しいものである。昨年、児童センターと老人福祉センターの混合施設で独楽を子どもたちとやっていたら、そこにきているおじいさんたちだけでなく、おばあさんたちも、懐かしそうにやっていたし、また、まわし方を聞いてきた。

できるようになることも必要であるが、女の先生が男の子の遊びだと思われている遊びをいっしょにやってくれるのは男の子には嬉しいものである。

## まとめ

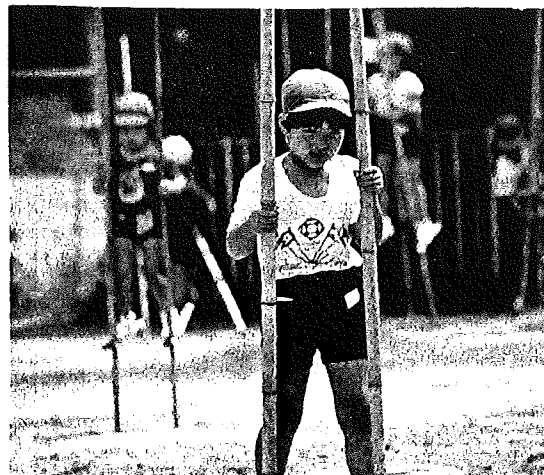
遊びの習得について書いていった。ただ、習得が目的ではなく、子どもたちが楽しむことである。しかし、できなければ楽しくない。そのために、今まであまり省みられなかった遊びの技を上手な仲間、年上の子どもまたは、保育者、指導者、親などのおとなからのみようみまねでの伝承ではなく、少し理屈でおとなが把握して、子どもたちにあたることも必要ではないかと思う。

そのためにも、今回はあまり触れられなかったが、その遊びの魅力、楽しさを追究して、そのためのわかりやすい解説が多く出てくることを期待している。

なお、今回の竹馬と独楽の幼児といっしょに取り組む活動として、私が幼稚園教員をしていたときの実践を基にしながらも、その後、同様の活動をしている他の幼稚園、保育園、児童館、学童保育などを実際に見学した子どものようす、また同じような活動に取り組んでいる方からお聞きしたことなどを検討して書いたものである。また、勤務した幼稚園を退職して7年経過しており、現在その園での活動内容を把握していないので、今でも行なっているか、どのようなねらい、方法で行っているかということにはわからない。従って、その幼稚園の現在の活動、保育内容とは関わりのない小論である。

## 註

- 1) 新聞でも、何か事件が起きたときや調査報告が出されたとき、また、新学期や子どもの日などの社説などでよく見られる。



- 2) その遊び自体の楽しさを指導する方もどう掴んでいるかということも大きな問題であると考えている。例えば、野球は、思い切りボールを投げ、それをいかにボールを遠くに飛ばして、その隙にどれだけ進塁するかというスポーツです。そこから、遠くに飛ばさせないために、より速いボールを投げるためのトレーニングをしたり、また、守備での速く走る、確実に捕球する、速く確実な送球することで対抗するスポーツである。また、サッカーは、ゴールをねらうのであり、そのために、基本的には、ゴールに正対する姿勢で、ゴールに向かってボールを蹴るスポーツである。大げさに言えば、今、日本のプロ野球がつまらないと言われたり、Jリーグが始まる前のサッカーがつまらなかったのは、このそのスポーツの楽しさを勘違いしていたのではないかと指摘してスポーツ解説者が多い。これは、子どもの遊びにも当然あてはまることである。
- 3) その遊び自体の楽しさを指導する方もどう掴んでいるかということも大きな問題であると考えている。例えば、野球は、思い切りボールを投げ、それをいかにボールを遠くに飛ばして、その隙にどれだけ進塁するかというスポーツです。そこから、遠くに飛ばさせないために、より速いボールを投げるためのトレーニングをしたり、また、守備での速く走る、確実に捕球する、速く確実な送球することで対抗するスポーツである。また、サッカーは、ゴールをねらうのであり、そのために、基本的には、ゴールに正対する姿勢で、ゴールに向かってボールを蹴るスポーツである。大げさに言えば、今、日本のプロ野球がつまらないと言われたり、Jリーグが始まる前のサッカーがつまらなかったのは、このそのスポーツの楽しさを勘違いしていたのではないかと指摘してスポーツ解説者が多い。これは、子どもの遊びにも当然あてはまることである。
- 4) 子どもたちに、教材を与える場合は同然レディネスを考えるべきである。自然発生的な遊びでも配慮がいるし、特に一斉に子どもたちに指導する場合は当然と考えるべきと思うが、どうも保育現場ではそうではないこともある。
- 5) この場合でも、一見すると後ろの方が簡単のようであるが、最初の頃はできる限り足乗せを低く設定しているので、階段を1段降りるようで済むが、歩き始めると多少の高さ、個人差があるが30cmから50cmが歩きやすくなる。すると既に後に降りてはバランスが取れない。また、後の項で書いていくが、1メートル以上の高さになると、確実に前に降りる、できる限り竹馬の間から降り、ちょうどスキーのような姿勢での着地が一番安全である。これをしないと、本人だけでなく、周りの者をあたってしまう。特に、壁から離れるときに後に降りると、思いの外に間隔があって壁にもたれることができず、後頭部や背中を打つこともある。
- 6) 今から20年ほど前実践でも、ほとんどのお父さんは、中学校卒業以来ベンチなど持ったことがないというのが現状である。そして、乗った事が無いし、作るポイントも知らないで、初めから足台を水平にして占めるので、子どもが乗ると例外なく下がる。そのため、教員が補修などを行っている。もちろん、大工さんなどでうまくいってつか作っていただくお父さんもいる。
- 7) 幼稚園で、「今月の活動予定」「次週の予定」を知らせると、事前にやってみせる父母がいる。例えば、「七夕に向け輪つなぎをする」と書けば、親子で輪つなぎ、「雲梯(うんでい)」と書けば、週末親子で公園にでかけて特訓とある。もちろん、障害を持っていて取っ付きが悪いためなど必要な子どももいるが、無意味というか逆効果になる。幼稚園や保育園などは他の子どもといっしょにやるのが教育的と考えている。暗い公園で親子で特訓など子どもの精神上も良くないと思う。しかし、多くの幼稚園、保育園、小学校の先生に聞くと、この傾向は強まっているところもある。逆に全くの無関心も増えたと言われる。
- 8) 少し補足すると、芯が出ていない独楽では、最初の紐を巻くときに滑って止まらないので、水をつけてから回す必要がある。後術するが、独楽の初歩では回るより紐を巻くほうが数段難しい。その点、芯が出ていると紐の端に瘤を作っておけば、ひっかかり巻くのは簡単である。なお、回すときの力の入れ方もこの2種では随分異なり、久振りに他の種類の独楽を回そうとすると難しいのである。
- 9) こんなところでも少数者に不利なところがある。なんとかしたいものである。しかし、製品以上に指導するおとなの方に左利きなどの少数者や不自由なところのあるものに配慮した指導などができない問題がある。ただ、問題が別であるが、一斉に投げて、プロレスのバトル・ロイヤルのように遊ぶときは、左利きの方が摩擦が少なく有利である。
- 10) この地方の鉄製で芯が出ていない独楽の方が難しいということから、その独楽を回せる者が、芯があるブリキ独楽を簡単に回せるという別である。もちろん、多少練習するとできるのであるが、回す、独楽を投げるとき力の入れ方が異なるので、両方できる私でも、感覚を取り戻す、調整しないとすぐには回せないのである。前述のように、ブリキ独楽が全国的で一般的であり、また幼稚園、児童館などでイベントなどでお年寄りに子どもたちに独楽の指導を依頼したときに、お年寄りが回せないことまある。お年寄りたちは、自分たちの独楽しか知らないこともあり、大変困惑する。そのとき、主催者やボランティアの方から「この地方のお年よりはみんな独楽が下手ですね」と言われることもある。独楽などの遊びの指導をしているお母さんたちでもそのように言われる方も多い。それは、「伝承遊び」ということには関心があるか、独楽のこと、伝承遊びのことを知らない者の言葉だと思う。
- 11) 細かな比較は避けるが、この地方の鉄独楽が難しい理由の第1にあげられるのが、この作業ができないからである。つまり、巻くために端を固定することが簡単にできないのである。鉄独楽がもう少し細い紐を使い、それをぬらして手で抑えていながら巻く。そして巻いた紐の力も借りて固定することになる。
- 12) どちらも同じと書いたが、その後、「手乗せ」、「綱渡り」など「曲芸」に進むなら、指に巻かずに薬指と小指に挟むとその後の「芸」の展開が楽である。小さな子どもへの指導では関係ないが蛇足まで
- 13) 相撲で仕切りの前に、膝を開いて深く曲げ、踵を上げた姿勢で、上体は真っ直ぐにしている状態である。